地ア地研たより

2019年8月10日
Ｎｏ． 48
発行者　有村宏紀
文　責　黒瀧善和

2019 夏季探査会実施

岩見沢の縄文遺跡 忘れられた地名を探って

8月8日
木曜日

８月８日(木)、2019 年の探査会を実施しました。今回の探査会は、①岩見沢で出土した石器時代から擦文期にかけての遺跡出土場所を巡る、②忘れられた地名の探査、の２点をメインに岩見沢市内をまわりました。今回も、岩見沢郷土科学館との共催です。参加者は、地ア地研の関係者が１５名で、科学館の参加者を合計すると４０名近い参加者数です。７月下旬から晴天が続き、連日３０度をこえる猛暑のため、熱中症を心配していましたが、この日は雨模様。気温は一段落です。雨天のフィールドワークの実施を心配しながら、1 日が始まりました。

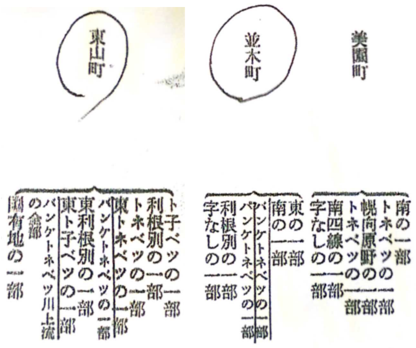
科学館では、春から岩見沢で出土した石器や土器などとともに詳しい解説を展示しています。どこからどのような物が出土しているかあまり知られておらず、これを機会に展示物をじっくり見学し、考古学の専門家である郷土科学館主事の杉浦さんに解説していただきました。解説では、石狩川付近では、自然堤防となっているやや高まっている場所からは遺物が出土しているものの，それ以外の石狩川付近からはあまり認められず、多くは丘陵付近から出土していること、石器時代から擦文期にかけての遺物であること、また、江戸時代の場所請負制度との関係関係からかアイヌ関係については数例のみであることが示されました。

野々沢遺跡付近
雨天のためバスの車窓から見学・解説

展示物を見学した後、縄文時代の遺跡である野々沢遺跡の場所を車窓から見学し、途中、孫別などアイヌ語地名を解説し、「ペンケトネベツ」に向かいました。小雨が降っていましたが、ペンケトネベツは予定通り徒歩での散策です。ポントネベツ川との合流地点から川に沿って説明を聞きながら歩きました。　「ペンケ」は地名としてよく目にする名前で、多くは「パンケ」と対になっています。

しかし、「トネベツ」には「パンケ」が見当たらないこと、「ポントネベツ」はトネベツの支流を意味しているのに、その枝川に「ペンケトネベツ(上流側のトネベツ)」という名前にな

っていること、地元でもあまり知られていないこと等、いくつかの疑問があることから、詳しく調べることになりました。顧問の水本さんは、岩見沢市史を詳細に調べ、1962 年(s37)に岩見沢全域で地名が改正され、現在の地名地番になったことを確認しました。その中には昔の地名が記載されており、「パンケトネベツ」の地名も見えます。これらの町名から、現東利根別川が「パンケトネベツ」と推定されます。また、同様の地名をカタカナ、漢字交じり川と区別した表記が確認され、それぞれがある程度の範囲を持ち、隣接・交錯していたと推測され、地名を整理したときに河川名も変えたのではないかと思われます。「ペンケトネベツ」についても、現トネベツとの関係など、疑問は十分に解決できませんでしたが、暗渠となっているパンケトネベツを遡り、自衛隊用地の沢を確認して、バスに戻りました。そこから、玉泉館跡地公園に移動し、遺跡が多数出土している「東山遺跡」について解説していただき、昼食です。


東山町
ト子ベツの一部
利根別の一部
トネベツの一部
東トネベツの一部
パンケトネベツの一部
東利根別の一部
東ト子ベツの一部
パンケトネベツ川上流
の全部
國有地の一部

並木町
東の一部
南の一部
パンケトネベツの一部
パンケトネベツの一部
利根別の一部
字なしの一部

美園町
南の一部
トネベツの一部
幌向原野の一部
トネベツの一部
南四線の一部
字なしの一部

岩見沢市史「地名番地の改正」

暗渠となっているペンケトネベツ上を歩く。道路がわずかに住宅より低まっている。

昼食後、バス車窓より「由良」「最上」「旧栗沢中学校校庭」等の遺跡場所を確認しながら説明を受けクッタリチャシ跡へ向かいました。

現在、国道 234 と JR 線路の切り通しによりクッタリ丘陵とチャシ跡は切り離されていますが、もともとつながっていたようです。チャシ跡は写真→の頭頂部にあったようですが、観光開発のため頭頂部の痕跡の確認は難しいようです。しかし、壕の跡や側面など残っているものも多いようで、詳細な調査の実施で確認できるそうです。杉浦さんからは、チャシについての分類など、併せて説明がありました。

長栗大橋からチャシ跡を見ながら、説明を受ける
やや雨も強くなり、トラックの風圧に耐えながら、説明に聞き入る

チャシについて　　　　Wikipedia より

孤島式　：　平坦地あるいは湖の中に孤立した丘あるいは島を利用したもの。

丘頂式　：　山や尾根の頂の部分を利用したもの。

丘先式　：　突出した台地（たとえば丘や岬など）の先端を利用したもの。

面崖式　：　崖地の上に半円形の壕を築き、その内部をチャシとするもの。

以上の 4 分類の中では孤島式と丘頂式が新しく、次いで丘先式が現れ、面崖式が最も新しい形式ではないかと見られている。

チャシの築造に必要とされた労働力は、およそ 100 人から 125 人/日と考えられており、一般的なコタンであればチャシの築造には一ヶ月ほど要したのではないかと推測されている。

玉泉館

HP によると玉泉館付近で数百年前にアイヌが冷泉を発見し、明治期、温泉を創業したそうです。このあたりは穴居跡が発見されており、古くから人が住んでいたので、鉱泉は古くから知られていたかも知れません。

←写真 玉泉館跡地公園 HP より

今年度の冬季研修会は、宿泊の希望も出ています。何か、希望があれば、お知らせ下さい。 E-mail kurota1201@yahoo.co.jp